大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

坊やは人気者？：物語における女児と男児について比較文学的に考える

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-05-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 堀江, 珠喜
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15363

第２回講演

坊やは人気者？

――物語における女児と男児について比較文学的に考える

堀江　珠喜

古今東西の物語において、女児に比べて男児の登場が多いとは周知の事実であるが、今回は改めて「坊や」の存在について考えたい。

まず、この議論にあたって気づいた次の３点について述べることにする。

①昔の子供時代は現代よりも短かった。子供も立派な労働力で、小学校では子守が雇い主の幼児を背負って授業を受けるクラスが設けられることもあり、また丁稚と呼ばれる商店の若い従業員は、通常13歳くらいから奉公を始めたが、ときには小学校に行きながら勤める場合もあった。人生が短かった分、凝縮されていたわけで、その点、平均寿命が伸びた現在、女性の初婚年齢が上がっても当然なのだ。ちなみに蝶々夫人がピンカートンと結婚したのは15歳、マリー・アントワネットがフランスへ輿入れしたのは14歳である。つまり、子供の年齢に対する我々の感覚で、昔の物語を理解するのは難しいといえよう。

②「人権」の概念のない時代、「子ども」という特権もなかった。「お子様」は特権階級の子どもに限られ、庶民の子はいわば「ガキ」であった。

③人気の高い物語において、中産階級は無視されがちである。つまり、セレブの優雅な夢物語か、貧困層の哀れな苦労と出世の話が好まれた。こ

の現象は、たとえばタイタニック号の沈没にあたって、一等客と三等客は対比されながら、それぞれの悲劇が描かれるいっぽう、二等客が登場する映画はほとんどない。確かに二等客の定員が最も少ないこともあり、人気物語に仕立てるには地味な存在だ。
一等客は救命ボートに乗り込む優先権を持っており、三等客は肉体労働者なので体力があり、規則や秩序を守るというマナーが劣っていた。そのため、優先権がなくとも、我先に、弱者を押しのけて助かり得たのである。ところが、二等客は優先権を持たず、マナーを守るという階層で、体力のないホワイトカラー族だったため、死者数は少ないが、死亡率が高い結果になった。だが、それでも中産階級は、なかなか悲劇の主人公にはなれないのである。

さて現代日本は、まさにこの無視される中産階級に属する国民の多い社会だ。たとえば『千と千尋の神隠し』でも、ヒロインはふつうのサラリーマン家庭に育っている。だが、異次元空間に迷い込むと、旅館の最下層労働者となり、まさに「お客様は神様」のために働かねばならない。このような立場の変化によってこそ、名作が成立したのだ。こうして女児の活躍が物語られる場合もあるが、圧倒的に主人公として多いのは男児なのだ。それはなぜか？

《「坊や」という言葉》

まず、日本語の「坊や」に匹敵する女児を表す言葉がないことに注目したい。いかにもあどけなく可愛い男児に愛情を込めて呼びかける際に使われるこの言葉の存在事体が、一般社会における男児の受け入れられ方を説明するものではあるまいか。英語ならsonnyだろうか。

「お坊ちゃん」には「お嬢ちゃん」、「お坊ちゃま」には「お嬢ちゃま」と対の言葉が日常的に用いられるが、「坊や」の対となるべき言葉がなく、いっぽう、「お嬢様」に匹敵する男児、あるいは男性を表す言葉もないのである。かつての名門なら「若様」と呼ばれただろうが、それなら「姫様」

がある。

言葉が欠如しているのは、それでも不便を感じなかったからで、つまり「坊や」と「お嬢様」が、物語られる対象になると考えられる。後者が名門出身であり、年齢にも幅があるのに対し、「前者」は幼く、その呼称には高い身分は必ずしも必要ではなく、発話者の男児に対する好感度次第となる。従って、名門「お嬢様」に比べて、「坊や」は物語の主人公の多様性を担保することになるのだ。

《なぜ男児なのか？》

2015年９月２日、トルコのリゾート地ドルムビーチにシリア人の３歳男児の溺死体が流れ着き、衝撃写真として報じられた。2016年には、シリアのアレッポ空爆で破壊されたビルから救出された傷だらけの５歳男児の姿も、戦争の悲惨さを訴える映像として発信された。まことに痛ましいニュースだ。だが、比較文学者として不思議に思わざるを得ないのは、なぜ男児で、女児ではないのか？　冷静に考えれば、このような事態においては、相当数の幼い女児も傷つき亡くなっているはずなのだ。男児の不幸について報じられるのは、単なる偶然なのか、それとも恣意的な結果なのか？

このように子どもたちが犠牲になる痛ましい現実について、そのような疑心を抱くことはヒューマニズムに欠けた冷血漢！と思われるかもしれないが、文学者は「感動や感嘆」で終わってはならないというのが持論である。それがいわゆる「文学少女」、「文学少年」との決定的な相違点だ。我々は、読者の感動の仕掛けを探らねばならないのだ。

上記犠牲者が、揃って幼い男児であるという点から思い出されるのは、ベトナム戦争終結直後、ホーチミン・シティ空港での１枚の写真である。駐越米兵だった父親の住むアメリカへ渡る少女と、彼女を見送るベトナム人の母との涙の別れの場面だ。これにインスピレーションを得た劇作家が、あのロングラン・ミュージカル『ミス・サイゴン』（1989）を生み出すことになった。ところが、このミュージカルでは「少女」が「坊や」に

なり、物語にはあの大人気オペラ『蝶々夫人』（1904）が利用されることになったのだ。どうやら「感動」の仕掛けは、古今東西、類似しているようだ。

ホーチミン・シティ空港のショットが「少女」なのに、なぜ「坊や」に替えられたのか？　そもそも蝶々さんが産んだのは、なぜ女子ではなく男子だったのか？それは「お涙頂戴には女児より男児が効果的」との「法則」があるからだ。誰が唱えたともなく、文学に携わるプロのあいだで囁かれてきたこの「法則」を裏付ける物語例は枚挙にいとまがない。どんな名優も子役と動物には負けるといわれるが､物語においては「坊や」が最強だ。たとえ動物が主人公でも擬人化される場合、やはり「坊や」として描かれるのが常であろう。「魚」であっても、ニモの人気は、ドリーのを越えるはずだ。

《母と坊やは「聖母子像」のイメージ？》

2016年ゴールデンウィーク・イベントを発信するリーガロイヤルホテルのチラシに、「テーブルマナーを学びながら、家族揃ってフルコース」、つまり、フレンチレストランで、子供に礼儀作法を教えてくれるらしい広告が掲載された。写真は、レストラン　シャンボールの長身で格好のいい従業員が、テーブルマナーをお客様の「坊や」に教え、その姿を母親が優しく見守っている（彼女については後ろ姿しかわからないが、上品な雰囲気を醸し出している）様子を伝えている。

そう、父と娘ではなく、ここでも「母と坊や」なのだ。もちろん「お涙頂戴」ではないが、「心温まるシーン」の演出にも、こちらのほうが適切なようである。つまりは、人の心に訴える組み合わせが「母と坊や」なのだ。この写真では父親は不在だが、それについて人は不思議に思わないものなのだ（不思議なことに！）。カトリックで人気の「聖母子像」にしても、父親抜きなのだ。

さて前述のベトナム人の母と米兵との間に生まれた娘の写真は、戦争が二人の人生を狂わせたことを物語ってはいるが、その後の彼女らの生き方

も想像できる。娘はアメリカで市民権を得て無事に成長し、母や親族もこの娘の縁者として後に渡米して永住する可能性が高い。だが、それでは「人気ミュージカル」にはならない。やはり母と幼い坊やとの「永遠の別れ」でなければ、観客にウケないのだ。（もっとも初演当時は、在米ベトナム女性たちが、「同胞女性を侮辱している」という旨、抗議活動を行っている。）

興行作品をリアリズムで解釈すると、腹立たしいことが多いものだ。『蝶々夫人』の頃の長崎では、現代の言葉にすれば「短期愛人契約」を西洋人将校とのあいだで結んだ女性は少なくなかった。その現実はピエール・ロチが『お菊さん』（1887）で描いている。なかには契約相手を本当に好きになった女性もいただろうが、ふられたために「死」を選ぶような社会だったとは思えない。しかし、エキゾチックな国で、若く美しい元芸者の蝶々さんが、不誠実なアメリカ軍人を愛して死んだというのは、欧米の男性にはゾクゾクするような美しいロマンスだったはずだ。

ただ、それだけではパンチが足りない。「男に騙された軽薄な女性が絶望して自殺」になってしまうからだ。プッチーニ作曲のオペラ『蝶々夫人』の場合、前半はピンカートンに恋する15歳の可愛い乙女だったヒロインが、後半（３年後）に幼い坊やのドロレ（イタリア語で「苦しみ」の意味）を抱いて登場するや、雰囲気は一変する。つまり、単なる失恋物語が美しく若い母と幼気な息子の運命を狂わせる悲劇となる。

蝶々さんは息子の将来をピンカートン夫妻に託し、誇り高き武士の娘として生き恥を晒さぬよう自害する。そんなことは想像もできず、日米の国旗を持たされ、目隠しされたドロレの姿に、実母との永遠の別れが迫っていることを知る観客は涙しよう。

プッチーニは、マンマミーアの国の男性の例に漏れず、実母への愛情が深かったそうだ。そもそもカトリックのシステムは現在に至るまで男尊女卑だが、昔からビジネス感覚に優れ、ちゃんと「マドンナ」を用意し、信者の心を掴んでいた。その聖母と幼子イエスとの「聖母子像」があらゆる場所に飾られている国に育ったプッチーニが蝶々夫人とドロレに、同様のイメージを重ねても不思議ではない。美しくて若い母と幼い息子の組み合

わせは、西洋絵画においては「聖母子像」のみならず、その真逆の官能的なヴィーナスとキューピッドにおいてもうかがえよう。

《「一杯のかけそば」考》

さてバブル時代の1989年、『週刊文春』５月８日号が売り切れた。実話に基づくという触れ込みの栗良平著の短編小説「一杯のかけそば」が掲載されたためである。今のようにはネットで情報が広がる時代ではなかったが、あっという間に評判となり、書店やキオスクから、この週刊誌が消えたのだ。

それほどの話とは、....1972年の大晦日、当然ながら、蕎麦屋、北海亭は朝から大忙し。夜になり閉店間際、これまで見かけたことのない小学生男児２名とその母親が入ってきた。母親は遠慮がちに「あの――...かけそば....一人前なのですが.....よろしいでしょうか」と注文した。蕎麦屋は、彼らの貧相な身なりから、黙って一人前半の量を用意した。３人は美味しそうに仲良く分けあって食べ、150円を支払って帰った。翌年も大晦日も一人前、その翌年は二人前を注文した親子に対し、気の毒に思った蕎麦屋はそれぞれ一人前半、三人前を出した。

彼らの会話から、父親が交通事故で亡くなったばかりでなく、相手への慰謝料の払いに極貧生活を強いられながら、ひたむきに生きてきたことがわかる。二人の坊やと母親との強い絆に、蕎麦屋の夫婦は感動せずにはいられない。以来、大晦日には、この親子のためにテーブルを空けておくことにした。しかし、その期待も虚しく、彼らは来なくなった。

それから14年経ち、立派な青年二人と、その母親が、大晦日の夜にやってきた。「あの.....かけそば.....三人前なのですが.....よろしいでしょうか？」蕎麦屋の夫婦は大喜び。聞けば、息子たちはそれぞれ京都の大学病院に小児科医（年明けからは札幌の総合病院勤務予定）と京都の銀行員になって、母親の苦労に報いていたのである。

当時、この物語に涙を流した（つまり大感激した）読者が多かったのだろう。「編集者も泣いた！」と、あるほどだ。だが、文学者の私は、あま

りの「あざとい」設定に呆れたほどだ。まず、哀れな背景を強調するのは「夜」、「冬」、そして「北海道」である。極寒で暗いだけで、悲しい気分になるが、これが常夏ハワイのワイキキで皆が昼寝している環境なら、まったく雰囲気が異なるはずだ。

そして「蕎麦屋」。間違っても高級フレンチではない。この物語が話題になったのは、バブル最盛期の1989年５月（ちなみに前都知事の舛添が東大を辞めたのが同年６月！）だ。つまりクリスマス前にティファニーのオープンハートを購入するため若者が走り回り、大晦日は正月料金設定のホテルが満室。あるいは正月はハワイ！などなど、日本中が狂ったようにカネを使っていた。そのタイミングでの家族経営の小さな蕎麦屋、しかも「一杯」というのは、とても新鮮なワードだったのだ。

もちろん最も重要なのは「母親とまだ小学生の息子二人」だ。この話の場合、あまりに幼いと、身の上が判明するような親子の会話が成立しないし、中学では声変わりも経て可愛らしさが半減する。小学生が、ちょうどいい年齢設定なのだ。もちろん父親は他界していなければならない。出稼ぎや長期出張、蒸発や服役中で不在というよりは、悲劇的な死とその後の遺族の苦労という不幸な経緯が、読者の「涙」に結びつく。

ただ、この「涙」は、後半の展開で「嬉し涙」に変わるのだ。母親は、二人の息子を、いわゆるエリートに育て上げた。ここが女児の場合と、大いに異なるのだ。この年代の女性でも医学の道に進むことは可能だが、男子に比べて少数だし、銀行なら今でいう一般職しかない。それは決して恥ずべき仕事ではないが、エリートコースを歩む男子に対してのようには褒め言葉「立派になって！」とは結びつきにくい。成長した女子への褒め言葉は「まあ、お綺麗になられて」と容姿に関するものが一般的だった。フィッツジェラルドの名作『華麗なるギャツビー』（1925）でも、出産直後のデイジーが看護婦に次のように語っている――「女の子でよかったわ。どうかおばかさんでありますように――女の子がこの世で美しいおばかさんでいられるのは、一番いいことなの」（I’m glad it’s a girl. And I hope she’ll be a fool-that’s the best thing a girl can be in this world, a beautiful little fool.）

つまり、「坊やが立派に成長した」と「お嬢ちゃんが別嬪さんになった（ので良縁に恵まれる可能性が高い）」では、はるかに前者のほうが「物語」として好まれるし、若くて美しい母親が絡めば、より効果的なのだ。

《貴種流離譚》

出世といえば、『小公子』（1886）で７歳のセドリックも亡き父親の代わりに、気難しい70歳の祖父、ドリンコート伯爵の後継者、フォントルロイ卿として、ニューヨークから母親と渡英する。祖父は、息子の結婚に反対していたが、この孫以外に跡継ぎがおらず、手元で育てるべく呼び寄せたのだ。しかし母親まで同居することは許さず、会うだけとの条件で、屋敷の近所に彼女は家を与えられる。

この母親の賢い点は、決して息子に祖父の悪口を言わなかったことだ。（彼女は孤児で、夫になる伯爵の三男に出会うまで気難しい老婦人に話し相手として雇われていたので、上流階級相手のノウハウに秀でていたと考えられる。）

母と離れて頑固な老人や召使たちと突然暮らすことになる幼いセドリックが、英国貴公子のDNAと米国人のフロンティア精神を受け継いでいるのか、いつも落ち着いており、自然体で初対面の彼らに接し、彼らを魅了するのだ。大きなマスチフ犬を怖がるどころか、初対面でなつかせてしまうところなど、祖父ばかりか読者の心をも掴むだろう。

いっぽう、『家なき子』といえば、日本ではあの人気テレビドラマの名セリフ「同情するならカネをくれ」と女児の名子役を思い出す方も多いだろうが、ここではもちろんH.マロのお家騒動物語について考える。マロの『家なき子』（1878）では、主人公レミの「ぼくは捨て子だ。けれども八つになるまでは、ほかの子どもたちとおなじように、自分にもお母さんがあると思っていた」との冒頭分で始まる。中部フランスで育ったレミは８歳で、猿や犬を連れた大道芸人に売り飛ばされ、放浪の旅に出る。結局は、英国の上流階級の長男だったが、赤ん坊のときに家督相続を狙う叔父に連れ去られ、捨てられたことが判明。本来の身分を取り戻すというハッ

ピーエンドだが、注目すべきはこの少年の年齢だ。『小公子』にしろ、『家なき子』にしろ、貴種流離譚の子は常に聡明で性格も良くハンサムのようだ。

《殺される坊や》

さて『家なき子』のセレブ坊やも、相続の絡むトラブルに巻き込まれたわけだが、ときにはこれが男児殺害計画に至ることもある。たとえば歌舞伎では、仙台、伊達家を舞台にした『伽羅先代萩』（1777）でも、鶴千代君（モデルは亀千代）の乳母、政岡の実子は千松という男児。飯炊きの名場面でも、政岡に「侍の子というものは、腹が減ってもひもじゅうない」との子役のセリフが観客の胸を打つ。鶴千代君を守るため、実子の千松が殺されてもポーカーフェイスを保つ政岡の心境に、これまで多くの観客が涙したに違いない。政岡は、千松の実母であると同時に、鶴千代の乳母という母親代わり（いや、ときには実母以上の存在）だったのだ。

「姫」との異なり、この「若様」の将来は「大名」。だからこそ反対派からの暗殺が予想され、政岡は我が子までも犠牲にするのだ。だが、もし千松が死なず、無事に鶴千代君が大名になれば、この乳母の息子の出世は約束されたも同然だ。昭和の高度成長期に「教育ママ」が社会問題のように取り上げられたが、企業戦士としてほとんど家にいない夫（父親）の分まで、母親がその尻を叩いて勉強させたのは、主に息子に対してだ。男子のようには就職口に恵まれなかった女子は、結婚して専業主婦になる、それなら縁談に有利なコースを歩ませたほうがいいと、母親なら考えたはずだ。男子なら東大を目指すように発破をかけても、女子なら「名門」女子大で結構、というわけである。息子の出世と娘の良縁こそ、母親の勲章だったのだ。

もともと男児は女児に比べ、出生率も死亡率も高いといわれている。かつては先進国であっても、今よりはるかに子供の病死が多かった。遺伝性の病気についても、色覚異常や血友病など、男性に発症する。ヴィクトリア女王がキャリアだったため、その後のヨーロッパの王室では、夭折する

王子が相次いだ。また女児に比べて活発なので事故に遭う可能性も高い。

将来の後継者として、やっと授かった男の子が死んだとき、やりきれない思いの親たちは、「魔女」や「妖精」のせいにして納得しようとしたに違いない。西洋では「チェンジリング（取り替えっ子）」伝説がある。妖精が幼い男児（大人の場合もあるが大抵は乳幼児）をさらい、その代わり醜い子や石などを置いてゆく。だが、魔法のせいで、両親には病気で弱ってゆく我が子に見え、ついに亡くなるとそのまま埋葬してしまうのだ。

この邪悪な妖精を騙すため、男児が一定年齢になるまでは、女児のドレスを着せられるという習慣があった。幼少期のオスカー・ワイルドや昭和天皇の写真には、男児らしからぬ衣装姿が見られる。前述のセドリックも乳幼児期に「女の子のような服」を着せられたとある。

おそらく妖精には、女児が不要なのだ。なぜか？　女児は男児ほど死ななかったし、死んでも男児のときほどは悲しまれなかった。だから妖精などのせいにする必要がなかったと考えられよう。「ヘンゼルとグレーテル」でも、魔法使いに食べられそうになるのは男児のほうだ。

さらに女子には相続権が認められない時代や場所においては、利害関係が発生しないので、前述の鶴千代君のようには、殺す必要がなかったのだ。そう、お家騒動で狙われるのは、男子、しかも長子に多い。また為政者にしてみれば、自分の地位を脅かすのも「男子」である。イエス誕生により、「ユダヤの王が生まれた」と聞いたヘロデ王は、自分の地位が脅かされるのを恐れてベツレヘムとその近辺の２歳以下の男児を皆殺しにする命令を出す。旧約聖書の「出エジプト記」でも、神が殺すのは「長子」だ。（聖書の中で「子」とは「男子」を意味する。）これがユダヤ教における最大のイベント「過ぎ越しの祭」の起源である。

「男児の死」は現代の映画でも、お涙頂戴の格好の物語として描かれる。不治の病にかかった少年を励ます周囲の人々の優しさ、というパターンである。

女の子の場合は、美しく成長し、家族の反対を押し切って愛する男性と幸せな生活を始めた直後に病死する、というなら泣ける。『ある愛の詩』（1970）だ。その場合、男性はハンサムでなければならない。どちらかと

いえば、観客は死んだ女性よりも、彼の嘆き悲しむ姿に涙するのだから。

キャサリン妃も大好きな英国の連続テレビドラマで20世紀初頭の貴族階級を描いた『ダウントン・アビー』（2010－2015）でも、伯爵家出身の妻を出産で亡くした（元お抱え運転手という身分違いの）夫が、生まれたばかりの娘に亡き愛妻の名前をつけて愛しそうに抱く姿に、視聴者は涙したことだろう。それは子に泣かされるのではなく、愛妻に死なれた可哀想な若い父親への同情によるものなのだ。

《『フランダースの犬』考》

セレブとは対極にある下層階級の男児は、貧困故に死ぬ。それが文学で描かれると、お涙頂戴の名作にもなる。その代表例が『フランダースの犬』（1872）だ。

もっとも東野圭吾は、本嫌いだった子供時代、母親から無理矢理に読まされたのがこの作品で、そのときの感想を『あの頃ぼくらはアホでした』（1995）で、次のように述べている――＜母親がうるさいので、いやいや読みだしたわけだが、はっきりいって『フランダースの犬』は、僕には全然おもしろいとは思えなかった。粗筋など、今ではすっかり忘れているが、唯一覚えているのが、「かわいそうな少年が、かわいそうな愛犬と共に、結局なーんにもいいことがなく死んでしまう話」ということである。こんな内容で、ワクワクしろとか、ドキドキハラハラしろとかいうほうが無理ではないか。「なんじゃい、本はやっぱり鬱陶しいもんやんけ」ということになり、ますます読書嫌いになってしまった＞。

私自身が小学校時代にこれを読んだ感想も「可哀想だけれど、賢くないよね」というものだった。たぶん「要領が悪い」とか「不器用」という意味だったと思う。この気持は今でも変わらない。これが女児と猫の組み合わせなら、なんとか逞しくサバイバルの方向に行くのだろうが、一般論として「犬」もお涙頂戴の物語に登場しやすいのだ。従って、「少年と犬の死」は「母と坊や」に負けないくらいの最強お涙頂戴パターンとなる。

ちなみに和製アニメ作品『フランダースの犬』は1975年１月５日～12月

28日まで、日曜日の夜７時半からのフジテレビ30分番組「カルピスまんが劇場」で放映された。東野圭吾が「かわいそうな少年が、かわいそうな愛犬と共に、結局なーんにもいいことがなく死んでしまう話」とまとめてしまった物語が、なんと52回にわたって延々、続けられたのだ。

制作に僅かながら参加した宮崎駿は「視聴率的には成功したんですが、僕はゴミみたいな作品だと思うんですけどね」とコメントしたようだが、事実、最終回の関東地区における視聴率は30.1％となった。年末の日曜日とあって、当日の同時間、他局は「輝く日本レコード大賞前夜祭」（TBS）、「スターものまね大合戦」（NET）、「お笑いオンステージ　てんぷく笑劇場」（NHK）など視聴率の稼げそうな番組を放送していたにもかかわらず、である。おそらく1975年には、ベビーブーマー世代の第一子が、そろそろテレビのアニメを観始めた頃だったためではあるまいか。

このアニメ作成にあたっては、より感動的な設定変更があった。原作では15歳だった少年、ネロの年齢は10歳に、ガールフレンド、アロアは12歳から８歳に引き下げられたのだ。また犬のパトラッシュも大型犬になり、少年の最期は犬とともに天使に抱かれて昇天するという宗教的にはハッピーエンドとされたのだ。（当時のスポンサーだったカルピスの社長がクリスチャンだったためらしいが、正月を目前に子どもたちを悲しませるのはカルピスのイメージを損なうとの計算もあったかもしれない。いっぽうアメリカでは、さらに分かり易いハッピーエンド、親切な大人にネロも犬も引き取られて幸せに暮らす話に変更したがる傾向が強いとか。ある種の「アメリカン・ドリーム」を肯定したいらしい。）

確かに、15歳でサバイバル能力に欠けているのでは、中卒の労働者がまだ少なくなかった日本社会においては「同情」しにくかろう。いっぽう10歳の少年では、まだまだ子供で、悲劇性が増す。そもそも男児の場合、10歳と15歳のあいだには大きな変化が生じる。まずは声変わりだ。10歳なら「天使の声」だが、15歳ならもはや大人の声、ときには「おっさんの声」となる。またズボンの長さも違う。短いスボンから幼気な細い足が出て、可愛い声で（アニメの場合、女性の声優が少年役を務める）語るだけで視聴者を魅了するだろう。

原作では、祖父が80歳のときに娘が亡くなり、２歳のネロを引き取った。それから間もなく子犬を拾う。すると、ネロが15歳なら、祖父は93歳まで極貧生活で長生きしたことになるし、そろそろ犬の寿命も限界の時期だ。犬の死期を悟ったネロが、教会で犬との心中を図ったのでは？というのが私の見解である。そもそも15歳の男子なら、近くのアントワープでの働き口が探せたはずだ。原作が書かれた時代、すなわち日本の明治時代、大阪の丁稚なら、早ければ10歳から奉公を始めている。15歳のネロが、まともに働かずに愛犬と心中する話に涙するのは「変」とすら思われよう。だが、それを実現されるのが「文学」の力なのだ。文学をリアリズムで読むべきではないのはわかっているが。

《『母をたずねて三千里』考》

少なくともネロの場合は、冒険心に欠けていた。だが、多くの男児は物語において命がけの冒険をする。その事実も、女児に比べて男児が主人公として描かれやすい理由となろう。勇気と行動力を美徳として、そしてそれらが将来の軍人としての望ましい資質として教える必要があったのではあるまいか。『クマのプーさん』（1926）においても、主人公の少年、クリストファー・ロビンは森の中で、リーダー的存在として皆から敬愛されている。（ちなみに、バービー人形がゲイの男性以外は女児や女性を引きつけるのに対し、テディベアは、男児はもとより、男性のコレクターのアイテムである。）

いっぽう家でおとなしく人形遊びをしているような幸福な女児をヒロインにして、人気を博するような「物語」を創作するのは難しかろう。その偉業を成し遂げたのはルイス・キャロルだ。『不思議の国のアリス』（1865）や『鏡の国のアリス』（1871）は、現代でも愛され続けている例外的な「少女」の物語で、しかも冒険談だ。しかし結局はどちらも夢の中での出来事だったし、「お涙頂戴」とは程遠い。幸福な少女が父の破産と死で、突如、不幸のどん底に落とされる『小公女』（1888）のセーラも、境遇が変わるだけで同じ全寮制の学校にとどまる。もし少年ならば、オリバー・

ツイストのように放浪を始めるかもしれないのだが、そうやって少女を待っているのは決して上品とはいえない人々で「堕落」の道が続くのみだろう。

だがアミーチス著『母をたずねて三千里』（1886）だと、どうだろう。前述のカルピスまんが劇場では、『フランダースの犬』の翌年、つまり1976年１月４日～12月26日までの52回で、『母をたずねて三千里』を放映した。原作は短編なので、これを30分番組の52回分に延ばすため、原作にはない多くの登場人物が追加されたばかりではなく、主人公、マルコの年齢は、またもや原作の13歳から10歳に引き下げられた。１年後（原作では２年後）に遠方まで母親を探しに行くという幼気な少年の大冒険を描くには、より子供っぽいほうが大衆受けするだろう。

それにしても、なぜ家の借金を返すために父親ではなく母親が出稼ぎに行き、しかも、なぜジェノバからはるばるとブエノスアイレスなのだ？
ふつう、出稼ぎに行くのは男性だろう。当時、多くの女性がジェノバからブエノスアイレスへに行き、短期間で大金を稼いだとの旨、説明がある。なんの技術力もない、ふつうの女性に何ができよう。マルコの母親は、かの地で家政婦として働くという。本当だろうか。物価や貨幣価値の違いにもよるが、果たして家政婦の賃金で借金が返せるか？　しかも往復の船賃も必要だ。

そこで思いつくのは、当然ながら、いかがわしい職業だ。実際、19世紀の終わり頃、多くのイタリア人がアルゼンチンへ渡った。ブエノスアイレスは栄えた港町だから、盛り場も多かった。アルゼンチンタンゴが娼婦と水兵のダンスと伝えられることからも、この場所の雰囲気が伺えよう。

そう考えて読んでみると、辻褄があってくるのだ。たとえばブエノスアイレスに先に渡った従兄の紹介で家政婦の仕事を得たが、主人に本名を告げなかったという奇妙な点だ。工場作業員とは異なり、家の中で働く者を雇うときには、かならず身元証明（多くの場合は、前雇用者の推薦状）が求められるはずだ。（家政婦になることは家名の恥との説明があるが、そんな名門なら出稼ぎは似合わないし、女性の職場が限られていた時代、「家政婦」は立派な仕事だった。だからこそ身元証明の提示が必要だった。）

なのに偽名で働ける「家」とは？――娼館だ。またこの仕事の仲介の「従兄」も、本物の親戚なのか女衒か怪しいし、彼を通して家族との手紙をやり取りしなければならなかったのも不自然である。

だが、ふつうの読者の目には、マルコ少年の勇気と母親への愛情と再会の喜びに惑わされて涙し、このような「裏事情」までは見えないに違いない。確かに「冒険の末に男児が母親に再会」というパターンは、人の心を掴む。映画『ホーム・アローン２』（1992）の見せ場は、ニューヨークの夜、ロックフェラーセンターの大きなクリスマスツリーの前での母親と少年との再会だ。「冬の寒いニューヨークのクリスマスイヴ」の設定は「北海道の大晦日の夜」と同じく、感動の舞台としてはちょうどいい。

マルコの冒険は、もっと長く困難を極めたし、再会したときマルコの母は病床に臥せっていた。幸い、彼女は元気になってハッピーエンドとなった。だが、幼い男児が母親に会いたい一心で長旅をする物語は、いつの時代も人の心を引きつけるのだ。（それとは対照的に、父親を訪ねる旅は描かれない。そもそも父親の不在は、家族が我慢するべき状況なのだ。出稼ぎばかりではなく、お国のために戦地へ赴いている場合もある。そんな父親に寂しいからと子たちが会いにいけるわけがない。家族も、お国のために耐えるのが美徳で愛国心というものなのだ。）

《子供時代を振り返る》

女性にも社会の成功者はいる。だが、絶対数は男性だ。それは日本経済新聞の人気連載自伝「私の履歴書」における男女数の違いからも明らかだ。また実在の人物でなくとも、人気キャラクターの子供時代を描く手法は、『ヤング・シャーロック・ホームズ』（1985）や『ヤング・インディー・ジョーンズ』（2008）に見られる。少年でありながら、将来の活躍を匂わすような言動なのだ。この場合も、冒険家や名探偵の絶対数が男性であり、今のところ「ヤング・ミス・マープル」は描かれていない。007シリーズの最新作『スペクター』（2015）でも、ボンドの少年時代が語られる。両親を亡くし（このあたりは「お涙頂戴」パターン）、親切な紳士に引き取

られて愛されるが、その紳士の実子が嫉妬し、宿敵となる。子供は親の愛情を感じられずに育つとひねくれて悪人になるという「教訓」のような話だった。

それならいっそのこと、『ゴッド・ファーザー　PARTⅡ』（1974）のほうが、純粋に「お涙頂戴」だ。シチリアでマフィアのボスに逆らった父が殺され、復讐を誓った兄も殺される。幼い次男の命を守ろうと母も殺される。思いがけない母・息子の別れを経て、渡米した主人公は、その後、マフィアのボスに成長するのだ。これが偉人伝とはいわないが、裏社会においての成功者の少年期を描いたこともあり現在でも名作とみなされている。

表社会の実話としては、偉人伝のほとんどが、聡明な「坊や」時代を描いていることを認識するべきだ。偉い女児についても語られないわけではないが、ほとんどは男児で、読者の子供に向けて「偉い坊やは偉い大人になる」とのメッセージが込められているように思われてならない。

さて、2016年の重大ニュースの一つは、予想に反してヒラリー・クリントンではなく、ドナルド・トランプが選ばれた。その理由を、さまざまなコメンテーターたちがしたり顔で説明しているが、本論に関連して解説させてもらえるなら、日本語版「ニューズウィーク」2016年６月21日号と10月11日号のカリカチュアが、はからずもトランプ勝利を予言している。この週刊誌は多くのマスコミと同様、反トランプ的だった。だから、６月21日号では、スーパーマーケットの床に転がって泣き叫んで駄々をこねる坊やを見ながら両親が「しつけをしっかりしないと.....」「次のトランプになるかもしれない！」と悩む様子が描かれている。また10月11日号には、嬉しそうなヒラリーが自分の膝にトランプ坊やをうつむきに抱いて、その尻を叩いてお仕置きをしている姿で、「うわーーーん　討論会はやらせだ！　司会者が不公平だった！　マイクが操作された！　えーん！　えーん！（クスン、クスン）」とのトランプの声が書かれている。

このどちらのカリカチュアも、反トランプ的だが、見落としてはならないのが、トランプが「坊や」として描かれていることである。そう、「坊や」は腕白でも我儘でも行儀が悪くても、人々は可愛く思い、つい許して

しまうのだ。少なくとも、一般論として「お尻を叩くガミガミ女」よりも、おいたをしてお仕置きされている「坊や」に人々の心は向いてしまう。つまり、「坊や」は特別な存在なのだ。トランプの暴言も、坊やの戯言だと思えば、気にすることはない。アメリカの依然として強い男尊女卑の空気に「坊や大好き」が合わされば、当然ながら今回の結果となるのだ。

　そう、古今東西「坊やは人気者」なのである。

注）本稿は2016年12月３日の講演内容をもとに、加筆、改稿した。